



時事

- | | | | |
|------------------------------|------|----------------------------------|------|
| ◆ 巻頭記事 | …P2 | ◆ J A フォーラム | …P12 |
| 農民と市民つなぐ「食の革命」 | | 県内全 1 2 農協合併で、1 県 1 J A に | |
| ◆ トップニュース | …P4 | ◆ アグリ研究室 | …P14 |
| ◆ トピックス | …P5 | 社会福祉施設が「食環境弱者」の暮らしを支える | |
| なぜレスター・ブラウン氏の予測は外れたのか | | ◆ 週間ニュースファイル | …P16 |
| ◆ 政策情報 | …P7 | 農林水産行政 | |
| 中央官庁だより | | グローバル | |
| 政策現場から— 福島県農林水産部長 | | 海外アグリ | |
| ◆ 「アグリ・フード輸出」情報 | …P9 | アグリ・フード産業 | |
| 拡大する高付加価値農業への ICT 活用 | | ◆ アグリ経営塾 | …P21 |
| ◆ 農と食のコラム | …P11 | 「にんじんジュース」で 6 次産業化に取り組む | |
| 宙に浮いた「位牌対策」 | | ◆ マーケット情報 | …P23 |
| | | ◆ 付録 | …P25 |

社会福祉施設が「食環境弱者」の暮らしを支える

＝青森県むつ市で、農と食と福祉の連携にチャレンジ＝

—地域福祉研究室 pipi 理事長・渡邊洋—

農が持つ意味を「生業」や「生き甲斐」や「社会参加」という視点から考えてみたい。もちろん「農業」と「農」とは意味を分けて使用する。「農業」という視点は生業（なりわい）につながる事となる。一方「農」が持つ意味の「生き甲斐」や「社会参加」は、農業の付随的な視点であるが、社会福祉は「生き甲斐」や「社会参加」の面に期待している。それは、「農」が持つ自然環境や景観保全の基盤に、「里山文化」を見出すことができるためだ。

例えば、「農」の耕作文化に根差してきた「結」や「講」という相互扶助のしきたりや習わしは、都会では排除されやすい障がい者や引き籠もり、生活困窮者を包含していく可能性がある。2015年度に生活困窮者自立支援法が施行されていて、解決策のよりどころとなり得る。しかも、地域社会での役割参加による予防的な視点（介護予防活動や健康寿命増進など）もある。また、都会での就労を失敗した者の「やり直し」を可能とするかもしれない。

もちろん、社会福祉の利用者の「農」への期待にもかかわらず「農業」として生計を維持していくことは困難な側面がある。それは、農業収入だけでは、消費生活を支えるには不安定であり、児童や高齢者の扶養を支えるためには厳しいからである。さらに、「農業」への新規参入の障壁もある。しかし、障がい者や引き籠もり、生活困窮者などが新規就労・訓練の機会を求めていることは明確にしておきたい。「農と食と福祉の連携」を横断的に組み合わせることで、6次産業化の可能性を模索することや、「農」と「食」に「観光」を組み合わせた地域社会での起業への期待もある。そこで、具体的な社会福祉領域での先駆的な事例を紹介しておこう。

◇恐山の麓にある高齢者施設「みちのく荘」の挑戦

青森県の下北半島は風光明媚ではあるものの、自然環境としては、冬場は雪に閉ざされており、交通の便も良いとは言えない。その環境に「[みちのく荘](#)」という高齢者福祉施設がある。むつ市にある特別養護老人ホーム、みちのく荘は1975年に開設され、北の大地で高齢者の革新的な支援を行ってきた。高齢者関係の法律に根差している法定の社会福祉施設であり、社会福祉法人「青森社会福祉振興団」が設置経営してきた。「医福食農連携」を实践可能としている数少ない高齢者施設であり、特に、社会福祉施設の中に医療機関を設置し、経営していることは特記できる。その一般外来も受ける病院には、青森県の芸術家の書画を展示する美術館まで設置し、「社会福祉施設の地域化」がされている極めて珍しい施設である。



渡邊 洋一（わたなべ よういち）

N P O 法人地域福祉研究室pipi（創設10周年）理事長、地域における食と農と福祉の連携の在り方に関する検討委員会（農水省）前座長、里山福祉研究所（野鳥庵）主催

（学歴）

日本社会事業大学大学院博士前期課程修了 社会福祉学修士、日本社会事業大学大学院博士後期課程（中退）

（職歴）

日本社会事業大学社会福祉学科講師、聖カタリナ大学社会福祉学科講師、淑徳大学社会福祉学大学院教授、青森県立保健大学大学院教授（3月未退官）

〔主な著書〕

「コミュニティケア研究」「コミュニティケアと社会福祉の展望」「コミュニティケアと社会福祉の地平」（いずれも相川書房）

「メンタルヘルスと自殺対策」（共著・相川書房）「地域福祉論」（共著・中央法規及び全社協）「なぎさの福祉コミュニティ」（共著・大学出版）など

この社会福祉法人は、特別養護老人ホームを市内2カ所設置している。この2カ所を中心に、地域包括支援センター、デイケアセンター、ショートステイ、リハビリテーションなどの介護保険制度に基づく各種施設に、「みちのくクリニック」を併設し、CTスキャンを設置している。診療科目は、内科とリハビリテーション科である。近隣からの通院診療だけでなく、訪問診療にも取り組み、社会福祉施設と連携している。本来、このような医療と福祉の連携は当然のことのように思われるが、実践事例は乏しい。その理由は、日本では縦割り構造と既得権益があるからだ。しかし、みちのく荘は、医療と福祉が連携した「安心空間」があり、恐山の山岳信仰に見守られたかのような不思議な安堵感がただよっている。終末期医療の過度の高度化の中でも、自然な死を迎えられる雰囲気がある。また、農の分野でも、「マルメロ」栽培をおこない、それを原料としたマルメロ酒の製造などに挑戦している。

◇食の文化への挑戦

日本の食環境は、輸入食材への依存などによって地産地消の食文化が衰退していると言っても過言ではない。もちろん、地元の新鮮な食材を社会福祉施設内の食事の厨房で調理することは当然のように全国で実施されている。みちのく荘は、施設内の厨房機能に加えて、2014年には小規模な工場「[みちのく城ヶ沢フードセンター](#)」を建設した。徹底した衛生管理のもとに、最先端のドイツ製の真空調理機などを導入している。高齢化が進行する北国の過疎地域では、買い物難民が多く、日々の暮らしの大きな障害が食の確保だ。そのために病院への入院や、施設への入所を希望する人も多い。このフードセンターでは、安全な保存と配達を確かなものにするために最新のシステムを導入した。

同センターでは、果物から魚肉まで既存の厨房機器では調理できない食事でも提供できる。パッキングされた食材を簡単に給食として提供できるこ

とに特徴があり、各施設に届けられた食事を実際に食べてみても、食感や味覚は自然のままのように感じられた。硬い肉の部位も高齢者が安全に食せるような柔らかさとなり、乳児の離乳食への応用もできそうである。台風によって落下した林檎も、このシステムで調理されると格段な味と風味に仕上がっていて保存にも適している。北国には、食材が豊富にあり、加工・調理・レストランでの提供といった事業化の可能性は無限にある。しかし、交通手段や人材などの問題があり、流通に乗せられるのは規格品にとどまり、規格外食材は廃棄されてきた。みちのくフードセンターの挑戦は、「食環境弱者」の暮らしを変える可能性がある。



みちのく城ヶ沢フードセンターの外観（上）と内部（下）



真空加熱調理機で柔らかく調理した鶏もも肉

◇「食・農」を核に「医・福」の混在化した暮らし

「みちのく荘」の挑戦は、税金に依存した補助金体質から脱し、経営・事業化を目指す困難な道のりだ。しかし、その医福食農連携のシステムは、里山福祉の場として先駆的・実験的なものであり、将来、「農林水産」と「食」による6次産業化の礎となる可能性を有している。このような食（本物食材と調理）と農（本物の農生産）と地域福祉（「安生」と「安育」と「安死」の文化）という日本の里山文化や歴史の中にあつた事象へと回帰する時が来た。そのキーワードは、農と食と福祉の連携である。

[＜表紙・目次へもどる＞](#)